

聖書箇所：ルカの福音書4章1～15節

説教題：試みを受ける時

## 1 疑問

このところは、聖書に触れことがある方ならばどこかで一度は読んだことのある印象深い箇所の一つです。悪魔は三つの試みをいたします。どれも同じパターンです。まず悪魔がイエスにことばを語り、「こうこうしなさい」と命令します。それに対して、イエスは「聖書にはこのように書いてある」とお語りになる。なんとなく、いつも悪魔が先手で攻撃を仕掛け、それに対していつもイエスは放たれた矢を防ぐのに精一杯という印象があります。

どうしてももっとイエスは積極的に悪魔に対して攻撃を仕掛けないのだろうか。どうしていつもイエスは弱々しく振る舞われるのか。ちょっと考えると不思議に思います。本当にイエスは弱々しいのか。本当にイエスは防戦一方だったのか。これから掘り下げて参ります。

## 2 悪魔の攻撃とイエスの反撃

### (1) いのちのパンとなる

一つ目は3節です。「あなたが神の子なら、この石に、パンになれと言いつけなさい。」イエスは荒野で四十日間断食しておりました。この方は神の子ではありましたが、私たちと同じ弱い肉体をまっとうおられましたから、お腹も空きました。悪魔は、イエスが空腹であることを知って、わざとこのようにことばをイエスに投げつけます。

イエスがこの悪魔の誘惑に対してどのよ

うに応じられたか。イエスは拒みます。できないからではありません。簡単に石をパンに変えることがおできになるのに、あえてそうしようとはしません。その理由について、イエスは聖書に、「人はパンだけで生きるのではない」と書いてあるからと説明されます。マタイの福音書では、「神の口から出る一つ一つのことばによる」と付け加えられています。それを聞いて、私たちはこう考えていました。「そうだ、だから神のみことばである聖書を大事にしなければ。」そんな結論を出して、納得したつもりになっていました。でも、それだけでしょか。

イエスはどなたですか。悪魔も言うように、この方は「神の子」です。それで、イエスはなんと言われましたか。「人はパンだけで生きるのではない。」この二つのことばを良く見比べてください。この方は確かに人の姿をとられ、人としての弱さを覚えておられます。お腹が空いています。でも神の子なのです。パンを必要とされる方ではない。パンを必要とするのは、いったいどっちですか。神の子ではない。人間のほうです。どんなパンですか。確かに肉の糧のパンもたいせつだけれど、それ以上にもっと大切なパンが必要であることをイエスはご存じです。イエスはこう言われました。ヨハネ6章35節。「わたしがいのちのパンです。」

イエスは、ご自分の必要のために石をパンに変えようとはされません。逆にこの方は、私たちのために、自分自身をいのちのパンと

してささげてください。悪魔の何が間違っていたのか、これで明らかになります。

### (2) 引き渡される

二つ目の誘惑を見ます。悪魔はこう言います。6 節です。「この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです。ですから、もしあなたが私を拝むなら、すべてをあなたのものとしましょう。」

これに対し、イエスは8節で反論されます。

「あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えなさい」と書いてある。」申命記からのみことばを引用されました。ここだけ読んで、私たちは考えます。「そうだ、主を礼拝しなければ。」そんな結論で納得したつもりになります。

もう一度悪魔が語ったことばをふり返ります。悪魔が語ったことばの中に大きなヒントがあります。6 節。「この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私はこれと思う人に差し上げるのです。」このなかの「任されている」ということばです。日本語ではつい見逃してしまうことばですが、聖書では大変重いことばとして使われているのです。「人の子は、いまに人々の手に渡されます。」(9章44節)「ユダ。口づけで、人の子を裏切ろうとするのか。」(22章48節)イエス・キリストが十字架に引き渡されていく、あるいは裏切られる、それがこのことばなのです。

そうしますと、どうなるか。イエスが言おうとされているのはもっと深いことです。わかりやすく言い直します。「わたし(イエス)

は、この国々のいっさいの権力と栄光の座から追われ、十字架に引き渡されていきます。裏切られていきます。それこそが父なる神をわたしが礼拝し、主にだけ仕えることなのです。」このようにして、イエスは悪魔のことばを逆手にとり、ご自分が歩まれる道を明らかにされていきます。

### (3) 十字架に上げられる

最後に三つ目の誘惑。それまでの二つの誘惑とは違っております。なんと悪魔は聖書のことばを引用しています。10 節。「神は、御使いたちに命じてあなたを守らせるとも、「あなたの足が石にうちあたることのないように、彼らの手で、あなたをささえさせる」とも書いてあるからです。」悪魔は詩篇 91 篇 11, 12 節から引用して自分のことばが聖書を土台にしていることを強調しました。

これに対し、イエスは語ります。12 節。

「あなたの神である主を試みてはならない。」と言われている。」

悪魔はこう語っています。「あなたが神の子なら、ここから飛び降りなさい。」「あなたが神の子なら。」この方は神の子です。まったく悪魔の言うとおりで。神の子なのだから下に飛び降りても父なる神が守ってくださるはずだと言うのです。私たちは、この悪魔のことばを聞いて思います。「確かにそうだ。この方は神の子なのだから、たとえ飛び降りても父なる神はこの方を守ってくださるはずだ。」そう思いたくなります。でもそう思った瞬間、実は悪魔の思うつぼにはまってしまうわけです。なぜ、悪魔の思うつぼなのでしょう。悪魔のどこか間違っていたのか。理由は二つあります。

一つ目。悪魔が示した方向はどことですか。

下の方向です。飛び降りることです。でも、イエスはどこに向かおうとされています。十字架です。十字架に上げられる方向です。向かおうとされる方向が反対です。悪魔はイエスが向かうべき方向について間違っただけを示した。それが一つ目の理由です。

でもこんな反論が聞こえそうです。「上でも下でもどうでも良いではないか。どっちにしても苦しむことには変わりがない。」いいえ、同じではありません。飛び降りるのは自分の意志によることです。しかし上に上げられるのはどうか。自分の意志ではありません。罪がないのに罪ある者とされます。先ほど見たとおりに引き渡されるのです。飛び降りることよりももっとつらい道のりを歩むことになります。

二つ目の理由。悪魔は詩篇を引用して、父なる神は神の子であるあなたをを守るだろう、と言いました。では、実際はどうだったのでしょうか。イエスが十字架におつきになった時、この方を守るようにと、速やかに救助の手が差しべられましたか。何か奇蹟が起きましたか。驚くべき光景が十字架に現れましたか。いいえ、何も起きません。イエスのからだは裂かれ、そこから血を流されました。イエスは、十字架で苦しまれ、無残な死に方をされました。悪魔が言うような「あなたの足が石にうちあたることのないように」、そのようなことは十字架では起きなかった。悪魔のことばは間違っていました。

でも、まだ納得できないところがあります。どうして父なる神はイエスを守ろうとされなかったのか。先週見たところですが、3章22節で父なる神はこう語っていたからです。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」そこまで語ってくださってい

るので、愛する子が十字架で苦しんでいるのなら、何らかの方法で助けの手を差し伸べても良かったのではないかと。いや、それができないというのなら、せめて、十字架で苦しむひとり子に、励ましのことばを語ってくださっても良かったのではないかと。それなのに、どうして父なる神は十字架で苦しんでいるイエスに何も語らず、何もされず、見捨てていかれたのか、理解に苦しんでしまいます。

父なる神とはどのような方か。愛するひとり子を救うことよりも、私たちを救うことをもっと大切にしておられる。父なる方は、ひとり子であるキリストが十字架で苦しんでも、それよりもっと私たちのことを大切に思い、私たちを愛そうとされている。そう考えなければ、つじつまが合いません。

ここで一つだけ補足しておきます。神のひとり子は本当に何も守られなかったのか。もしそうなら、みことばは間違っていたことになります。確かに、十字架ではなんの守りもないように見えました。でも、この方はよみがえられました。みことばのとおりです。悪魔はひとり子が死ぬはずがないと誘惑します。主の守りは、あなたは死なないということではありません。たとえ死んでも、死からよみがえらせてくださる。それが主の本当の守りであることを教えてください。

### 3 試みは恵みに変えられる

今日は、イエスが悪魔の誘惑を受けられた場面を見て参りました。こうして見ますと、すべてはイエスの十字架を邪魔しようとするものであったことがわかってきます。悪魔に対し、イエスはかろうじて攻撃をしのいだのかと最初は思っていました。でもよく見るとそうではない。

悪魔がの口から繰り出される攻撃の矢は様々でした。あなたは自分のために奇蹟を起こすことができる。あなたは、この世のいつさいの権力を手にすることができる。あなたは、父なる神があなたを守りを期待することができる。

イエスはどうかされたか。ご自分のために奇蹟を起こすことはありません。その代わりに、人々を救いに導くためだけに奇蹟を行われました。この世のいつさいの権力と栄光を手にするのではなく、むしろいつさいのものをお捨てになられました。父なる神が守ってくださるのではなく、父なる神に見捨てられていきました。

私たちの目に、厳しい試みと見えたこと、イエスはその試みをすべて私たちに対する恵みへと変えてくださいました。ご自分を守るためにではなく、私たちが救うために戦ってくださっていたことを、今朝覚えて御名をあげたいと願います。